

聖書:ルカの福音書21章10~19節

説教:忍耐によって

はじめに

前回のあらすじを振り返ります。あるひとりの貧しいやもめがなけなしの数百円を献金箱に投げ入れたところ、イエスはそれをご覧になって「この人はだれよりも多く投げ入れた」と高く評価された話しから、神殿が崩されること、世の終わりのしるし何かという話しへと移っていきます。最初はばらばらにしか思えなかったこれらの話しは、よく調べるとすべてが十字架で献げられていくイエスの御からだというテーマでつながっており、イエスの十字架と世の終わりのことが一つのこのように重なって語られていたことが見えてきました。

今日はその続きです。せつかくの日曜日、少しは明るい話が聞けるかと期待したら、迫害される、裏切られる殺される、憎まれる、そんなことばかりが出てきてなんとも重苦しい。こんな目に遭うのならクリスチャンにならなかつた方がよかつたのではないか。そんな疑問さえ湧いてきます。どうしてイエスはこのようなことを語ったのか。どこに希望があるのか。ともに考えてまいります。

1 世の終わり

1) 戦争と天災

人々が、世の終わりはいつ来るのか、そのときどんなことが起こるのかと尋ねるとイエスは、「私はイエスの生まれ変わりである」と名乗る者が現れたり、戦争、暴動も起きると語ってから、10、11節でこう続けます。「それから、イエスは彼らに言われた。『民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、大きな地震があり、方々に飢饉や疫病が起り、恐ろしい光景や天からの大きなしるしが現れます。』」

いままさに世界では戦争や暴動が起きています。国が国に敵対して緊張しています。13年前もそうでしたが、この正月も大きな地震が起きたばかりです。飢饉や疫病と聞けば、まさにコロナウィルスが世界を襲った。もう聖書に書かれていることがそのまま目の前で起きています。昨年教会ではクーラーを設置したり、つい最近も2月なのに最高気温が13度になり観測記録を更新したと報じられ、地球温暖化は遠い話ではなくまさに目の前の現実として迫ってきているのを実感します。

でもどうでしょうか。戦争や自然災害は、どちらかと言えば自分の責任というよりも、どこか外

から降りかかってくる災難のようなものです。クリスチャンであろうがなかろうが関係ありません。みな「公平に」経験する苦しみと言っていいでしょう。

2) わたしの名のために迫害される

でも12節はどうでしょうか。「しかし、これらのことすべてが起こる前に、人々はあなたがたに手をかけて迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために、あなたがたを王たちや総督たちの前に引き出します。」

いったいこれは誰のことか。「わたしの名のために」とありますからクリスチャンのこと。こうなるもはや自然災害どころではありません。自分がクリスチャンであるかどうかが大きな問題になってきます。

今の時代は「信教の自由」が保証され、公には迫害されることはありませんから私たちは恵まれている。でもおよそ八十年前は、教会の礼拝に憲兵が立ち会い、少しでも天皇や国家を批判するようなことを言うものなら直ちに牧師は逮捕投獄、教会は閉鎖されたと言われます。クリスチャンとわかれば、周りから「非国民」とののしられ、大変な苦勞をした。もっと歴史をさかのぼればキリシタン弾圧もありました。そんな先輩たちの苦勞があつたおかげ今私たちが自由にクリスチャンだと名乗れる。でもいつまでもこんな恵まれた時代が続くのではない。必ず迫害の時代が来るとイエスは言われます。

2 そのとき

1) 知恵のことばを与える

そのときどうするか。14、15節。「ですから、どう弁明するかは、あらかじめ考えない、と心に決めておきなさい。あなたがたに反対するどんな人も、対抗したり反論したりできないことばと知恵を、わたしが与えるからです。」

あなたがたは迫害されると聞けば、誰もがそうになったらどうしようと心配するでしょう。でもイエスは言うのです。今から心配しなくてよろしい。あなた方のすべきこと、語るべきことはそのときになったらわたしが教えます。本当だろうか。いざとなったら頭が真っ白になり、からだガタガタ震え、口は濁いてしどろもどろになるに決まってい

ます。せつかく「あなたはこう語りなさい」とイエスが耳元でささやいてくれているのに、気が動転してそんなものは聞こえないのではないか。いや、それどころか「私はイエスを捨てます」と叫んで「転んで」しまうのではないか。どんどん心配になります。

2) 殺される人もいます

心配はまだあります。家族や親しい人たちから裏切られ、すべての人に憎まれるとあります。これだけでも暗くなる材料としては十分ですが、「中には殺される人もいます」と聞けば、もうクリスチャンを止めたほうがよいさえ思ってしまう。「あなたがたの髪の毛一本も失われることはありません」と言われても、なんの慰めにもなりません。19節はもう最後のとどめです。「あなたがたは、忍耐することによって自分のいのちを勝ち取りなさい。」苦しい迫害にがんばって耐え忍んだものだけがいのちを勝ち取ることができる。だからあなたがたは怠けてはいけない。日々努力して立派なクリスチャンになりなさい。もうそんな風にしか聞こえませんか。

3 「いのちを勝ち取る」の意味

1) 厳しいことばの中にイエスの十字架が隠されている

イエスは本当にそんなことを語っているのでしょうか。他の宗教では、精進して、努力してと人間の頑張りとか功績が救いの条件とするかもしれませんが、聖書は違う。救いは私たちの努力で勝ち取るものではなく、恵みとして神様から一方的にいただくもの。これが聖書が一貫して言っていること。私たちの努力は一切要求しません。でも19節はまるでその反対のことをいっているように聞こえてしまいます。

よく皆さんから、聖書を一人で読んでもよくわからないのでなにかいい方法はないでしょうかと相談されることがあります。そういう方法があったら私も教えてもらいたいくらいです。とは言え、福音書に限ってのことではありますが、こんなことを頭に入れながら読むとわかりやすくなるというコツがあります。厳しいと思えるところにイエスが隠れている。別のことばで言い換えれば、厳しいと思えることばの中にイエスの十字架が隠されている。このコツを覚えておくとよい。それでこのコツを実際に応用しながら今日の箇所を読んでみたいと思います。

2) 誰が迫害されたのか

聖書にはこんなことばが並べられていました。「あなた方を迫害し王たちや総督たちの前に引き出します。裏切られます。殺されます。憎まれます。」このようなつらい目に遭うのはだれか。「あなた方」すなわち、私たちだとなっている。しかしよく考えてください。イエスはどのようにでしょうか。イエスこそまさにここを通られた方ですよね。弟子の一人に裏切られ、友人と思っていた弟子たちはイエスを捨てて逃げました。祭司長たちの手にかかって逮捕され、ヘロデ王と総督の前に引き出され、死刑の宣告を受けて殺されていった。まさにここに書かれてあるとおりのところを通られた。先ほど挙げました福音書を読む時のコツは、厳しいと思われているところにイエスが隠されている、でした。ここはどうでしょうか。確かに私たちも迫害され憎まれ裏切られることにはなるかもしれない。けれども、あなたがただけがそうなるのではない。イエスが真っ先にこの道を通っておられた。そのことを思い起こすことになります。

3) 誰が迫害したのか

では次に考えたいのは、では一体誰がイエスを迫害したのかということです。直接的には祭司長、律法学者たち。そして彼らについていった民衆たちでした。ポンテオ・ピラトが裁判の席でイエスを指して「この人は死に値することは何もしていない」と言ったのに、民衆は「十字架だ。十字架につけろ」と叫びました。その結果どうなったかはご存じのとおりです。私たちはあのときあそこにはいなかったかもしれないけれど、だからといって罪を免れることはできません。私たちもイエスを十字架に追いやった罪人です。それが「イエスの名によって」という意味です。イエスの名はどこまでも私たちを追いかけてきて、罪を指摘するのです。

4) 苦しむとき主が私たちのそばにおられる

一体どこに望みがあるのでしょうか。19節は「忍耐することによって自分のいのちを勝ち取りなさい」で、これを読むとあたかも苦しいマラソンレースを耐え抜いてゴールまで完走した者だけが救われるかのような印象を受けます。でもそんなはずはない。

こう考えることができます。イエスはこう言っていたことを思いだしてください。15節。「あなたがたに反対するどんな人も、対抗したり反論したりできないことばと知恵を、わたしが与えるからです。」もし迫害にあったなら、一人で歯を食いし

ばってがんばれ、ではない。主がふさわしく助けてくださるということです。それができるということは、主が私たちのそばにいつもいてくださるからですね。すべてわかってくださるから最も適切なことばを与えることができる。そうしますと「忍耐して」とあるのは、私たちだけが忍耐するのではない。主も一緒に忍耐して下さっていることになります。そもそも私たちのいのちはだれからいただいたのですか。イエスです。イエスからすでにいただいている。いまさら努力して勝ち取るものではない。

よく「イエス・キリストが私のそばに本当におられるのか、よくわからない」と質問される方がおります。そんな方にはこのような答え方ができる。19節はこう言っている。「あなたがたが主の名によって迫害され苦しむとき、主も一緒に受持かで苦しんで下さっていることがわかります。主と一緒にであるということから、私たちはいのちをすでに与えられていることがはっきりわかる。」

このようにして、厳しいと思われるこのところにもイエスの十字架が隠されていることが見えてきます。ですから19節はこう言ったことになるのではないのでしょうか。「あなたがたはしばらくの間苦しみにあうけれど、必ず永遠のいのちをいただき、救われることがすでに決まっているので、さばきの日、終わりの日には喜んで約束のものをいただきなさい。」

納得するのは難しいかもしれませんが、たとえ殺されることがあったとしても、私たちは絶望する必要がないということです。なぜなら主は迫害を受け、十字架で殺されましたが、三日目によみがえられたからです。「髪の毛一本も失われない」というほどに確かなこと。主によって救われた者は、どんなにひどい目にあっても死ぬことはない。それがはっきりしているので、これは変な言い方ですが、イエスは堂々と私たちが迫害にあって苦しむのだと告げることができる。それほどに私たちがいただいている救いがすばらしいものであることを今一度覚え、御名をあがめたいと思います。